

げのびました。宮城前の広場は住むに家のない焼けだされた人で一ぱいでした。中でも殊に気の毒であったのは子を持つ親のやるせなさであります。子供は無心に笑いながら親のち房をしゃぶって楽しい夢路をたどっています。こうして恐怖にみちた一夜も明けて二日の朝は天空高く上りました。平和な大東京も一寸の間にたやすく破壊されてしまいました。私達が永遠にわすれることの出来ない此の日はとても言葉に言いつくせないみじめさでありました。家も衣服も其の他何もない焼けだされた人の心はどんなでしょう。」（『東京市立小學校兒童震災記念文集』東京市学務課、1924 年より）



図4 「宮城前」(「震災絵葉書」より) 1923 年

宮城前（皇居前）広場（東京都千代田区皇居外苑1）には、震災発生直後から約10万人の避難民が集まったという。内閣府資料によると都内では上野公園に次いで2番目に避難民が多かった場所である。

子どもたちの証言② 「九月一日を追懷して」 神田区 西小川尋常小學校 6年男子

「大正十二年九月一日は我等を呪ったあの恐ろしい大震火災のあった日である。其の日は丁度空高く晴れ渡っていて是が二百十日かと思う様な好天気であった。正に時計の針が十二時を指さんとした刹那「ゴー」と地鳴りがすると共に忽ち大地がゆれだした。一秒二秒と益々震動が烈しくなる。家は倒れ、山は崩れ、土地は裂け花の都は忽ちにして修羅場と化してしまった。己が家内のものを助けるため救いを求めているもの、血まみれになって走って居るもの、泣き叫ぶもの、実に悲惨な光景となった。見る見る内に四方に火の手が上った呪いの火は帝都をなめつくさんばかりの勢をもって四方に広がった。僕等は九段にひなんした。人々の顔は皆青ざめて居る。火勢は益々加わるばかりである。しばらく悲惨な沈黙が続いたかと思うと「東京は全滅だ」「此处が焼けたらどうしよう」などと悲痛な叫び声が聞こえて来る。どどーんと言う砲兵工廠の火薬の爆発と共に地が少しゆれる、人々益々不安の色深くなりて行く。太陽は西に没してあたりは暗くなって来た。火は燃えるばかりである。一日、二日、三日と火は燃え荒れた、見渡す限りの焼野原となった。」（『東京市立小學校兒童震災記念文集』東京市学務課、1924 年より）

子どもたちの証言①②は、淡路尋常小學校（千代田区神田淡路町2丁目23-7／後に廃校、現在はワテラス〈高層ビル〉と千代田区立淡路公園）の生徒のものであるが、それぞれの避難先は、上野公園と宮城（皇居）であった。また、証言③の西小川尋常小學校（千代田区西神田2丁目6-2／後に廃校、現在は西神田コスモス館）の生徒は、九段方面に避難している。その他、当時の女性や子どもたちの証言をひも解いていくと、震災直後の混乱した様子が実によく伝わってくる。災害は、人々の生活、生命に大きな影響を及ぼすが、女性や子ども、高齢者など、社会的により弱い立場の人々への人的被害が大きいことが改めて確認される。これは現代の私たちにも共通することである。

（２）千代田区域における関東大震災の映像の分析

国立映画アーカイブでは、所蔵の映像をウェブサイト（関東大震災映像デジタルアーカイブ：<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/>）で公開している。このウェブサイトでは、撮影場所、シーンで分類された「クリップ」単位での検索・閲覧が可能となっており、千代田区域のシーンには「地割れした和田倉濠付近の道」「地割れした牛込駅前の道」「壁が損壊した郵船ビル」「火災炎上中の神田方面を望む」「炎上する帝国劇場と警視庁」「神田明神高台から万世橋駅方向を望む」「焼け残った万世橋駅」「愛国婦人会による救援活動」「靖国神社境内のバラック」「宮城外苑の避難民収容テント」「日比谷公園野外音楽堂前の野外少国民学校」「焼跡となった神田駅前」「日比谷公園内に設置されたバラック」「焼失した如水会館と崩落した一ツ橋」など32篇公開されている。ここでは「愛国婦人会による救援活動」を紹介したい。

映像「愛国婦人会による救援活動」 麹町区の愛国婦人会本部で救援物資を積み込む人たち

「関東大震災映像デジタルアーカイブ」（国立映画アーカイブ）

https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/clips/m01_034.html

愛国婦人会とは、明治34年（1901）に創設された団体で、近代日本で最初の全国的規模の婦人団体である。日本国内だけでなく、世界各地にも拠点があり、最盛期には700万人の会員がいたという。関東大震災の直後の活動としては、類焼を免れた九段の本部にいち早く事務所を置き、まず九段郵便局内に罹災者を収容し救護にあたった。それと同時にフランス大使館跡や牛ヶ淵公園などに避難していた約二千人に炊き出しを行ったという。とくに女性・子ども・高齢者の救護・支援に力を入れ、母乳の足りない人のために、「牛乳に依る育児法」という配布物を作成したり、妊産婦乳児保護班（産婦人科医一人、産婆二人、看護師一人）二班編成し毎日巡回診療を行ったという。このような女性団体による先駆的な救護・支援活動が千代田区から始められ、その活動が徐々に広がりを見せたことは注目できよう。震災後の女性たちによる主な支援活動・救援活動と内容は次のとおりである。

女性たちによる支援活動・救援活動

震災直後：愛国婦人会

9月4日：日本基督教婦人矯風会

9月11日：日本女子大学桜楓会

9月20日：自由学園

…東京連合婦人会の結成

（支援活動・救援活動内容）

- *避難生活の場や食事の提供
- *衣類や布団の配布
- *授産所の設置、職業の紹介
- *個別カードを用いた調査など



図5 「愛国婦人会発祥の地」の碑
（千代田区九段南 1-6-11）筆者撮影

2. 企画展「千代田区における過去の自然災害—安政大地震と関東大震災—」展の開催

(1) 趣旨

2021 年度から始まった「千代田学」共同提案事業「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」も最終年度となる。【研究 1】「千代田区における過去の自然災害の歴史記録の集積」の一つの集大成として、パネル展だけではなく、実物資料・作品での展覧会を企画した。くしくも 2023 年は関東大震災の発生からちょうど 100 年にあたる。1923 年 9 月 1 日に関東地方を襲ったこの大地震では、死者・行方不明者 10 万人に上ったが、さきに触れたように共立女子職業学校（現・共立女子大学）では甚大な被害があり、校舎・寄宿舎の倒壊だけではなく、教職員・学生の計 74 人の方が亡くなっている。今後数十年のあいだに巨大地震が起こることが予測されている現在、過去の自然災害、とくに千代田区域で起きた過去の自然災害について、関連する資料を展示・紹介することによって、私たちができる備えについて考える機会を持つことは意義のあることである。

(2) 展覧会開催に向けて

展覧会を開催するにあたり、まず学生を主体としたプロジェクトチームを結成した。具体的には、2023 年 7 月から私が受け持っている授業（講義・ゼミ）の受講生を中心にメンバーを募集し、9 月までに次の 6 名の学生からエントリーがあった。

加藤 恵	(共立女子大学 文芸学部 2 年)
亀岡愛実	(共立女子大学 文芸学部 2 年)
貴田紗由香	(共立女子大学 文芸学部 2 年)
杉山みなみ	(共立女子大学 文芸学部 2 年)
ス ニン トゥー	(共立女子大学 文芸学部 2 年)
濱野なつめ	(共立女子大学 文芸学部 2 年)

上記学生 6 名と教員（近藤）とのプロジェクトチームが 9 月から本格的に始動した。

学内での展示を念頭に置いてのことではあるが、学生全員が学部 2 年生で展覧会に携わることが初めてということもあり、教員（近藤）の指導のもと、展覧会を共に作り上げていくというかたちで進めた。具体的には、毎週月曜日の 5 時限終了後（19 時 10 分～・本館 12 階 1273 研究室前にて）ミーティング・勉強会を開催することとし、第 1 回ミーティングにおいて、次のタスクが学生たちに示された。

(3) プロジェクトメンバー・タスク

- ① 千代田区における過去の自然災害についての研究
- ② 展覧会（「千代田区における過去の自然災害～安政大地震と関東大震災～」展）の開催
- ③ ② 図録（小冊子）の作成
 - ・資料・作品解説の執筆
 - ・コラムの執筆
- ④ 各種イベント
 - ・ギャラリー・トーク（展覧会開催期間中）
- ⑤ その他
 - ・② のフライヤー（チラシ）、リーフレットの作成

- ・展示パネルの作成
- ・展示キャプションの執筆

⑥ 展覧会見学（勉強会）

- ・特別展 関東大震災 100 年「首都東京の復興ものがたり～未来へ繋ぐ 100 年の記憶～」
2023 年 11 月 26 日（日）まで 場所：千代田区立日比谷図書文化館

まず優先的に決める必要があることは、展覧会を「いつ」「どこで」開催するかということである。実物資料を展示することから、資料の運搬費用やセキュリティの面からも、学内での展示ということがまず決まった。ただ、学内での展示可能期間が入試や他のイベントとの兼ね合いにより限定された。この点はプロジェクトの始動が遅かったことが原因であり、悔やまれる。しかしながら、短期間ではあるものの共立女子大学神田一ツ橋キャンパス本館 1 階の展示スペース、および展示ケースを確保することができた。ミーティングを重ねたうえで、最終的には次の内容で開催することが決定した。

○展覧会名称：「千代田区における過去の自然災害
～安政大地震と関東大震災～」展

○主催：千代田区キャンパスコンソーシアム・共立女子大学

○会期：2023 年 12 月 18 日（月）～25 日（月）

10:00～17:00（日曜休）

○出品内容：安政大地震と関東大震災の関連資料、約 50 点

○入場料：無料

○関連事業：学生によるギャラリー・トーク

2023 年 12 月 23 日（土）13:30～14:30

○会場：共立女子大学 神田一ツ橋キャンパス

本館 1 階 展示室

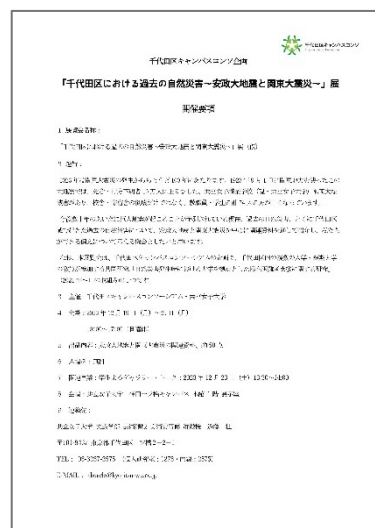


図6 展覧会 開催要項

展覧会の「開催要項」の確定と同時に、学生と資料調査を進めながら、展示資料・作品の選定、キャプション（解説文）執筆の割り振り、展示パネル・コラムの執筆なども順次進められた。展示資料・作品の選定については、教員主導で行ったが、キャプション・展示パネル・コラムの執筆については、学生たちが主体となり、「自分が調べたいもの・執筆したいもの」を選んでもらい、教員がそれをサポートするというかたちをとった。また、教員が用意したタスク以外に、学生たちから展覧会のキャラクターを作成したいという要望が出された。キャラクターは学生がデザインしたいくつかの案が出され、ミーティングによって、図7が本展のキャラクターに決定した。このキャラクターは、展覧会場でのパネルやキャプション、バナーあるいはフライヤーなどに登場させ、ややもすれば重いテーマである展示内容を中和してくれる役割を担ってくれた。



図7 学生デザインによる本展
キャラクター「ナクケン」

(4) 展覧会出品資料選定

展示資料の選定については、2021 年度から行っている千代田区における過去の自然災害の歴史記録の調査過程で確認した資料を中心として、展示・借用可能な資料をリストアップしていった。とくに安政大地震と関東大震災の2つの自然災害を取り上げるため、資料がどちらかに偏ることのないようバランスを考慮しながら選定を進めた。具体的な資料としては、《鯨絵》(複製)や《震災絵はがき》など、神保町の古書店周辺で収集した資料、国立国会図書館、東京都立中央図書館が原本である複製資料、千代田区在住・在勤の方の個人所蔵の実物資料など、25 件の資料を選定した(表3)。

表3 「千代田区における過去の自然災害—安政大地震と関東大震災—」展(出品リスト)

No.	資料・作品名称	作者名	員数	時代(制作年)	備考
1	《鎮火安心図巻》	鬼蔦斎	1巻	嘉永7年(1854)	複製(原本・国立国会図書館)
2	安政の大地震大火絵図		1枚	安政2年(1855)	
3	《町火消纏装束之図》上・下		2巻	江戸時代(19世紀)	複製(原本・都立中央図書館)
3	《安政大地震鯨絵》		一括	安政2年(1855)	複製
4	鯨絵《大鯨江戸の賑ひ》		1枚	安政2年(1855)	複製
5	鯨絵《鯨の見舞い》		1枚	安政2年(1855)	複製
6	鳶口		2点	明治～昭和初期	
7	龍吐水		一点	19世紀	
8	火消頭巾		1点	昭和初期	
9	火消半纏《纏》		1領	昭和初期	
10	絵はがき《廃墟の都》(震災スケッチ第一集)	神保朋世	4枚1組	1923年	
11	絵はがき《廃墟の都》(震災スケッチ第二集)	神保朋世	4枚1組	1923年	
12	《関東大震災全地域鳥瞰図絵》	吉田初三郎	1枚	1924年9月	
13	絵はがき《尋ね人》	露谷虹児	1枚	1923年	
14	絵はがき《焼跡の月》	露谷虹児	1枚	1923年	
15	絵はがき《絶望》	露谷虹児	1枚	1923年	
16	絵はがき《家なき人々》	露谷虹児	1枚	1923年	
17	絵はがき《関東大震災》(古写真)		一括	1923年	
18	《震災かるた》	川端龍子	絵札48枚、文字札48枚	1923年	
19	新聞記事《大阪毎日新聞号外》		1部	1923年9月2日	
20	新聞記事《東京日日新聞》		9部	1923年10月	
21	大正大震災被害明細 最新東京市全図		1舗	1923年	
22	東京大震災火災絵巻		2巻	1923年頃	
23	《大正十二年 帝都大震災火災系統地図》		1舗	1923年12月	
24	《関東大震災画報 写真時報》		1冊	1923年10月1日	
25	絵はがき《罹災者ヲ探ス西郷サン》		1冊	1922年3月	

(5) 展覧会広報

展覧会の広報用資料としてフライヤー（チラシ）を作成した（図8）。配布先は、千代田区内の各文化施設、千代田区キャンパスコンソの各大学、また本学の教職員・学生には、各授業内や教授会などの機会に随時配布を行った。またポスターについては、予算の関係で作成しなかったが、ウェブサイトなどSNSでの情報伝達・拡散に力を入れた。



図8 「千代田区における過去の自然災害～安政大地震と関東大震災～」展フライヤー（オモテ・ウラ）

(6) 会場設営・展示作業

展覧会の準備・展示作業は、2023年12月16日（土）に行われた。展示パネルやバナーなどは、作業当日までに印刷業者に作成を委託をし（原稿はプロジェクトメンバーによる）、キャプションは、貼りパネ（7mm厚）を用いて、手作業で作成を行った。



図9 展示解説パネル



図 10 有孔ボード(パンチングボード)の運搬



図 11 展示バナーの取り付け作業



図 12 展示作業完了

(7) 展示の様子

展示会は2023年12月18日(月)から25日(月)までの7日間、共立女子大学神田一ツ橋キャンパス1階の展示ホールで開催された。キャンパス1階の学生・教職員が自由に行き来できるスペースなので、来場者数はカウントしていない。ただ、会場内にメッセージ・ボードのブースを用意し、任意で観覧者からのメッセージを募ったところ、多数の感想が寄せられた(図16)。内容は、勉強になった、満足度が高い、という好意的な内容が多く、概ね評価していただいたことが実感できた。

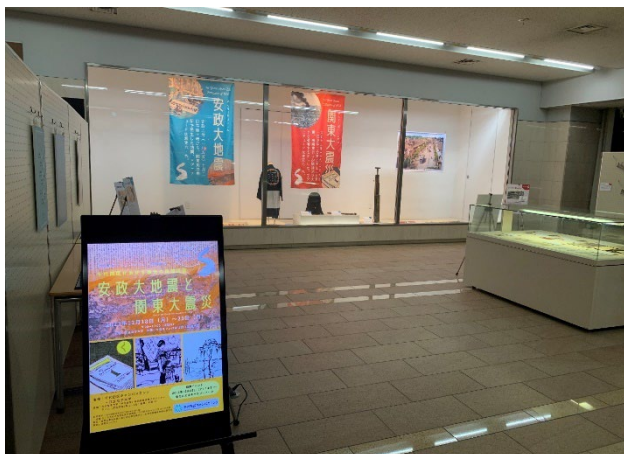


図13 展示入口(手前はデジタルサイネージ)



図14 震災かるた(1923年)と防災グッズ



図15 手前は関東大震災の実物資料、壁面は震災絵葉書

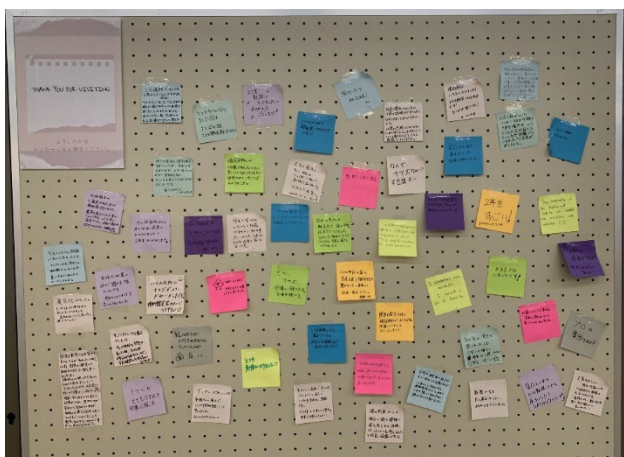


図16 展示会のメッセージ・ボード



図17 展示パネルの例 ②

(8) ギャラリー・トーク

展覧会の関連イベントとして、2023年12月23日（土）13時30分から学生によるギャラリー・トークを開催した。冒頭で教員（近藤）が全体の趣旨説明を行い、その後プロジェクトメンバー（学生5人）による、展示資料の解説が行われた。



図 18 ギャラリー・トークの様子 ①



図 19 ギャラリー・トークの様子 ③



図 20 ギャラリー・トークの様子 ②

3. 「関東大震災 100 年」パネル展の実施

展覧会「千代田区における過去の自然災害—安政大地震と関東大震災—」展とは別に、今年度も関東大震災の記念絵葉書の中から、千代田区域内の様子を写した写真をピックアップして、パネル展「関東大震災 100 年」を開催した。

関東大震災の記念絵葉書は、震災直後の1923年から相当数発行されている。甚大な被害を受けた様子、ときには目を覆いたくなるような悲惨な場面を写した写真が絵葉書として一般大衆に流通するという感覚は現代のそれとは異なるものといえる。それは、一つに現代と当時のメディアの違いということが大きいだろう。100年前の当時は、現代のようにテレビやインターネット、SNSなどの情報伝達手段はもちろんなく、絵葉書という媒体を通して、文章ではなく、写真というヴィジュアルコンテンツで人々に震災の現状・情報を伝達するという役割を担っていたといえる。

展示は、千代田区域における関東大震災の記念絵葉書と『関東大震災画報：写真時報』（東京写真

時報社、1923 年 10 月）所載の東京焼失区域地図、計 15 枚を A1 サイズに拡大、解説を添えパネルとしたものである。各展示期間は次のとおりである。

- * 6 月 12 日～6 月 16 日（共立女子大学神田一ツ橋キャンパス 2 号館 1F ギャラリー）（図 21）
- * 9 月 1 日（共立女子大学神田一ツ橋キャンパス 2 号館 2F）（図 22）
- * 9 月 9 日（千代田区男女共同参画センターMIW／千代田区役所 4 階）（図 23）
- * 9 月 11 日～10 月 2 日（法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー 1 階（図 24）
- * 11 月 1 日～13 日（東京家政学院大学千代田三番町キャンパス 1 階ロビー）



図 21 共立女子大学神田一ツ橋キャンパス
2号館1F ギャラリー(6/12～16)



図 22 共立女子大学神田一ツ橋キャンパス
2号館 2F (9/1)

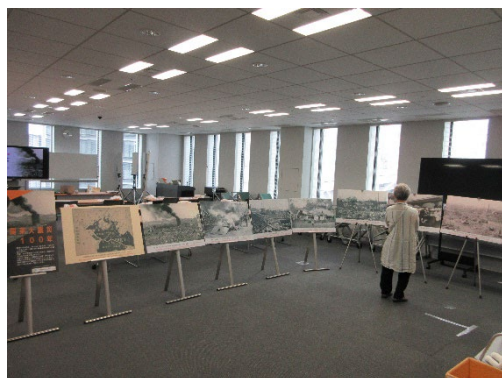


図 23 千代田区男女共同参画センターMIW
/千代田区役所4階 (9/9)



図 24 法政大学市ヶ谷キャンパス ボアソナード・タワー1階 玄関ホール(9/11～10/2)

おわりに

今から 100 年前に関東大震災という未曾有の災害があったことは、誰もが知っていることであろう。100 年前と比べれば、災害時の情報収集・伝達、提供システムなどは格段に充実している。また、社会体制や私たちの生活スタイルも大きく変化している。だからといって、100 年前の出来事を単なる過去のものとするのは早計だろう。過去の災害の情報を知ることによって、そこから学ぶことはたくさんある。被災者・帰宅困難者の支援・対策、避難所の運営など、100 年前のそれと変わらず、改善の余地が多分にあることも多いといえる。そして、今を生きる私たちは改めて災害の歴史に向き合い、災害時にどのような行動をとるべきか、どのように困難を乗り越えていくか、思考の比重をより傾け、誰の身に降りかかってもおかしくない災害というものに備えていくべきである。

参考文献

- ・『関東震災画報』第1～3輯、大阪毎日新聞社、1923年
- ・『関東大震災画報：写真時報』東京写真時報社、1923年10月
- ・『大正大震災写真帖』報知新聞編輯局、1923年
- ・『大震災写真画報』第1～3輯、大阪毎日新聞社、1923年
- ・「震災後の一年間」『大阪朝日新聞』1924年9月15日
- ・『大正十二年 大震災記念写真帖』山田商店、1931年
- ・『新編 千代田区史 通史編』東京都千代田区、1998年
- ・『共立女子学園百年史』共立女子学園百年史編纂委員会、1986年
- ・『東京市立小學校兒童震災記念文集』東京市学務課、1924年
- ・『(財)東京市政調査会市政専門図書館所蔵関東大震災に関する文献目録』(図書編 雑誌編「都市問題」掲載編)
(財)東京市政調査会市政専門図書館、2005年1月
- ・『千代田区女性史』(全3巻) 千代田区・千代田区女性史編集委員会、ドメス出版、2000年
- ・折井美耶子・女性の歴史研究会『女たちが立ち上がった 関東大震災と東京連合婦人会』ドメス出版、2017年
- ・上村千賀子『メアリ・ビーアドと女性史：日本女性の真力を発掘した米歴史家』藤原書店、2019年
- ・関東大震災映像デジタルアーカイブ (国立映画アーカイブ)
<https://kantodaishinsai.filmarchives.jp/> (参照日：2024年3月1日)
- ・ANNnewsCH【関東大震災 100年】被災者支援に女性が団結 映像の西洋人女性は誰？(2024年3月1日)
<https://www.youtube.com/watch?v=G5PaAPILtzs> (参照日：2024年3月1日)
- ・浅野富美枝・天童睦子編『災害女性学をつくる』生活思想社、2021年
- ・浅野富美枝『関東大震災 被災者支援に動いた女たちの軌跡』生活思想社、2023年

第2節 千代田区の災害に関するウィキペディア記事執筆ワークショップの実施

谷島 貫太（二松学舎大学 文学部）

1. はじめに

ウィキペディアタウンと呼ばれる、オンライン百科事典 Wikipedia を活用したワークショップが存在する。これは、地域の文化財や史跡を対象とし、グループでウィキペディアの記事を執筆・編集していく試みだ。実施の形式にはバリエーションがあるが、多くの場合では、実際に街歩きをしながら取材を行い、また文献資料を読み込みつつ記事を書き上げていく。この作業を通して、その対象についての深い知識を身につけていくことができる。加えて自身の作業が Wikipedia の記事として公開されることで、その対象について一種の愛着とまた責任感のようなものも生まれる。ほかにもさまざまなメリットが存在するが、ウィキペディアタウンは総合的な学びの機会として注目を集めており、コロナ前には毎週日本のどこかでこのワークショップが開催されるという状況にあった。

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科の谷島貫太ゼミでは、2023年度千代田学「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」の一環として、「災害」をテーマとしたウィキペディアタウンを実施した。千代田区内の災害に関連するトピックのウィキペディア記事執筆を通して、災害についての学びの機会を生み出していくのが狙いだ。本章では、2024年2月25日に実施されたワークショップについて報告していく。

2. 災害とウィキペディアタウン

谷島ゼミでは2018年度から開始したウィキペディアタウンの試みは、2020年度以降、コロナの感染拡大を受けて休止となった。感染状況もある程度落ち着いてきた2022年度に、千代田学採択事業「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」に加わる形で、この年度からは「災害」をテーマとしたウィキペディアタウンを実施することとなった。

ウィキペディアタウンを実施するにあたって、最初に重要となるのが記事執筆対象として取り上げるトピックの選定だ。この選定にあたっては、1) まだウィキペディアの記事が存在しておらず、2) 独立した記事として取り上げる価値があり、3) 記事執筆にあたって十分な文献資料を利用することができる、という条件を満たす必要がある。多くの重要な歴史的文化的文化財にはすでに記事が存在しており、また興味深い文化財であっても関連資料を見つけられないものについては記事を書くのが難しい。ウィキペディアタウンにおいては、丁寧に典拠となる資料を示しながら記事を書いていくことが求められる。

検討の結果、今年度は神田の大火を取りあげることにした。昨年度取り上げた「南明館」という勧工場（明治から大正にかけて登場した、百貨店の前身となる商業施設）をトピックとして扱った際に神田の大火も関わっていたことも判断材料の一つとなった。そもそも神田は江戸期から火事が多発した地域であり、また火事は都市の形を大きく変える契機としても機能していた。神田の大火を切り口とすることで、災害と都市の関係について再考することができるのではないかと考えた。ただし神田の大火という表現は多くの文献に現れるが、実際にはこの言葉は特定の火事のことを指すわけではない。神田地域では多くの大火が起こっていることから、文脈によってこの言葉によって異なる火災が指し示される。まずは神田の大火が指し示する正確な対象を整理するところから

調査を開始した。

2-1. 資料調査

資料調査はまず千代田区の千代田図書館で行ったが、調査の結果、国会図書館のデジタルコレクションに多くの関連資料が公開されていることが判明した。加えて、デジタルコレクションの公開範囲に含まれていない資料の調査のため、一部の資料については日比谷図書文化館および国会図書館を利用した。

神田地域では江戸時代より多くの火災の被害に遭ってきたが、今回のワークショップでは明治と大正の時期に生じた火災に焦点を当てることとした。明治維新を経て、東京という都市の形は急速に変容を遂げつつあり、それぞれの時期に生じた火災はその時点での東京の在り方を浮かび上がらせる触媒として機能しているからである。明治大正期に限っても神田地域では多くの火災が生じていたが、調査の結果、以下の三つの火災を取り上げることとした。

○明治期の大火

・松枝大火（明治14年）

神田松枝町から出火し、家屋の全焼一万戸超、被災者も3万6000人を超えた大火。被災地域には橋本町のスラム街も含まれ、当該区画の再開発のきっかけともなった。同年発令された東京防火令の効果もあり、翌年からは神田地区の大火は大きく減少するが、その直前に起こったものとしては最大の大火だ。

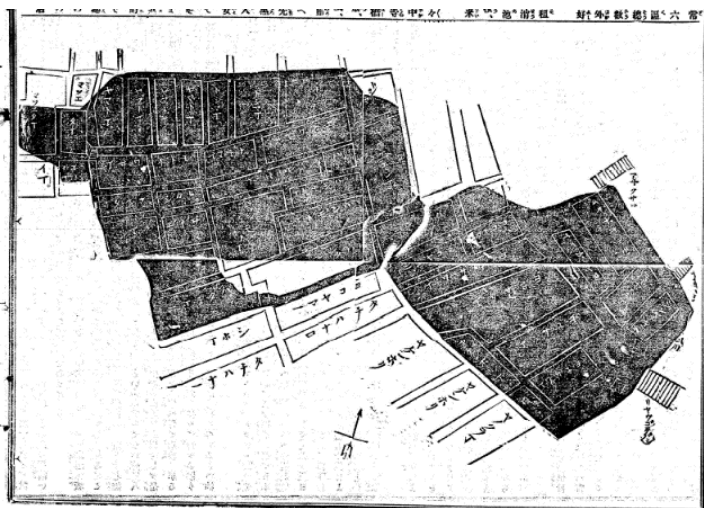


図1 松枝大火焼失範囲（読売新聞1881年1月27日）

・猿樂大火（明治25年）

1892年(明治25年)4月10日の午前0時30分ごろに、神田区猿樂町一番地から発生した大火。24人が焼死、36人が負傷し、神田区と日本橋区を含む149,206平方メートルが焼失した。死傷者の大半が、上述の南明館の前身である洽集館（こうしゅうかん）で発生し、商業施設における防火対策に関する新たな法律が作られるきっかけとなった。



図2 猿樂大火の焼失範囲（東陽堂「風俗画報」(41)）



図3 治集館焼失の図（同左）

○大正期の大火

・三崎大火

1913年（大正2年）2月20日午前1時20分ごろ、神田区神田三崎町二丁目5番地（現在の神田三崎町一丁目9番）の救世軍大学植民館寄宿舎付近より出火した大火。焼失戸数は全焼2375戸、半焼72戸であった。防火対策が進み、火災の発生が大きく抑えられていった大正期間における最大級の大火。神保町の本町通りも大きな被害を受け、本町通りの形を大きく変えるきっかけともなった。



図4 三崎大火の消失範囲（保険銀行時報(609)より）

調査を進める中で、明治期以降の日本における近代化の各時点での諸相が、火災を通して浮かび上がってくることが感じられた。たとえば都市計画、建築思想、防火対策、消防制度、保険制度、スラム対策など、火災に対する都市としての対応をめぐる文献のなかには、近代化の諸課題がさまざまな形で表われていた。調査を通して見出されていたトピックは多岐に渡るが、比較的マイナーなトピックについては共有資料には含まなかった。またワークショップの限られた時間のなかで、実際に記事に反映できた情報は、調査された文献に含まれた情報の一部にとどまった。

2-2. 広報と本番準備

資料調査と並行して、イベント管理プラットフォームの Peatix を利用し広報を開始した。またワークショップ本番で実施する取材をかねた街歩きのルートを選定も進めていった。検討の結果、今回は特定の場所に取材に行くというよりは、大火で焼失した地域を実際に歩いてみて、その消失範囲の広さを体感してみる、という方針を取ることにした。取り上げる予定の三つの大火のうち、松枝大火はワークショップ会場から距離があるので外した。三崎大火の発火元が会場から比較的近かったことから、その地点を出発点とし、三崎大火の消失範囲をぐるっと歩いていくことを軸としながら、途中で猿楽大火の消失範囲も体感できるような寄り道も組み込む、という形でルートを作っていた。

参加者の募集は例年と同様に、イベント情報集約サイトの Peatix で行った。当初は1月13日開催の予定であったが、スケジュール上の問題が発覚し、2月25日に日程を変更した。募集期間を十分とれたこともあり、12名の参加者から応募があった。



図5 街歩きのルート
(Google Maps の my map)

2-3. 資料の整理

これまでのウィキペディアタウンでは紙の資料が中心で、資料リストはワードファイルにまとめて参加者に共有していた。しかし今回の資料の中心は国会図書館のデジタルコレクションに収録されている資料であり、また点数もかなり大きくなった。そのため資料リストはMicrosoft Word 形式ではなく、Google スプレッドシートでまとめ、参加者にリンクを共有するという方針を取った。

参加者に共有された Spreadsheet の一部

2-4. ウィキペディアタウン当日

ワークショップ開始の1時間前に集合し、会場の設営をしたのち、参加者の受付を行った。以下が当日のタイムテーブルだ。

10:00 - 10:15	受付
10:15 - 10:50	イベント趣旨説明およびウィキペディアの編集についての解説
10:50 - 12:00	フィールドリサーチ／記事用の写真撮影
12:00 - 13:00	昼食休憩
13:00 - 15:30	記事執筆
15:30 - 16:00	記事講評／振り返り
16:00	解散

当日欠席者が出たため、学生スタッフも執筆メンバーに加わることにし、各チーム4名ずつの8名で執筆作業に当たることにした。人数の関係上、執筆トピックは猿樂大火と松枝大火の二つとし、「神田の大火」という独立した項目を立て、その中の下位項目として二つの大火について記述することとした。

以前のウィキペディアタウンに参加してくれたことのある参加者も何名かいたが、日常的にウィキペディアの記事執筆にかかわっている参加者は1名だけであった。はじめてウィキペディアの記事を編集する、という参加者も1名いた。

10時の定刻からワークショップを開始し、趣旨説明の後、ファシリテーターである Araisyohei 氏によるオリエンテーションおよび谷島貫太二松学舎大学准教授による題材についての説明が行われた。あわせて参加者の簡単な自己紹介と、挙手制でどちらの記事を執筆するかを決めるグループ分けを行った。

街歩きに際しては、事前にルート上に位置する場所の過去の写真などを集めた資料をアップロードし、スマホで資料を参照しながら歩けるように準備をした。



図6 大火直後の三崎町の惨状（『神田の大火』）



図7 佛英和高等女子學校の惨状（同左）



図8 錦町の工科學校の焼け跡（同上）



図9 猿楽町の避難民の様子（同上）

あいにくの小雨であったが、三崎町にある三崎大火の火元と推定される地点へとまず移動した。そこから延焼方向を記述した当時の記事などを説明を参照してもらいながら、アップロードされた資料を通して往時の状況に想像を巡らせつつ、三崎大火で焼失していった範囲の縁に沿う形で街歩きを進めていった。



図10 街歩きの様子①



図11 街歩きの様子②

通常のウィキペディアタウンでは、記事の対象となる文化財などを実際に見て写真を撮ったりするが、今回のトピックは特定の建物ではなく、また関連する建物はすべて焼失してしまっているため、基本的には過去の資料をもとに当時を想像しながら街を歩くという形になった。そんななか、カトリック神田教会や学士会館など、被災後に同じ場所に再建された建物は、とくに想像力を喚起する役割を果たしてくれた。スタッフによる説明をはさみつつ時折立ち止まりながら約一時間かけて予定のルート歩いた。参加者たちは、歩いてきた範囲のほぼすべてが焼失してしまったという事実を、軽い疲労とともにリアリティをもって体感することができたようだった。神保町交差点の救世軍本営のあ

たりで昼食休憩解散となった。そして13時に会場に各自集合して午後の作業を開始していった。

午後のパートは、お題を使つての簡単な練習から作業を開始した。与えられた文章をもとに、付箋を使って基本的な情報を書き出していった。10分の時間が与えられ、ホワイトボードに張り出した付箋の情報を整理し、事典の項目として必要な情報を組み立てていった。この練習を踏まえて、グループごとに資料の読み込みを開始していった。



図12 資料の検討を始める



図13 付箋にまとめた情報をもとに内容の整理



図14 ひたすら執筆作業

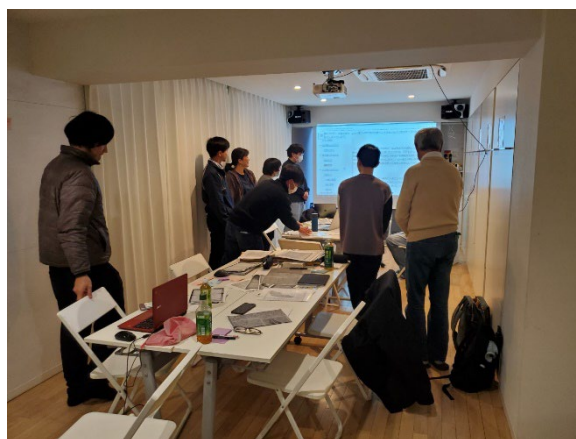


図15 最後の講評の時間

記事の構成案ができると、今度は担当を決めて関連資料を読み込むフェーズに移る。各テーブルには付箋が用意されており、ファシリテーターの Araisyohei 氏から、資料内の必要な情報を資料の出典情報とあわせて付箋に書き込んでいくようアドバイスがなされる。参加者が黙々と資料を読み進めていくなか、様子を見てスタッフが参考になりそうな資料を紹介していく。ホワイトボードに整理された各記事の構成表の各パートに、情報を書き込まれた付箋が貼り付けられていく。

例年、時間が大きくとられる作業の一つに出典情報の整理がある。記事執筆に際して、個別の記述に注を付け、しっかりと出典を付けていく。その際には、出典の文献の著者や書籍名、出版社、出版年など情報を細かく書き込む必要がある。しかし今年度は事前に Spreadsheet に情報をまとめ、さらにファシリテーターの Araisyohei 氏がウィキペディアにそのまま読み込ませることができるようにタグを設定してくれていたため、出典の表示は極めてスムーズに進めることができた。しかしそれで

も明らかに時間が足りず、残り時間のカウントに焦った声がテーブルのあちこちから聞こえてくる。

グループで記事執筆を進めていく際には、編集競合にも気を付けなければならない。同時に並行して編集を進めてしまうと、作業が衝突してどちらかの作業が消えてしまうことがある。なのでこまめな声掛けが必要となる。この日、急に作られたチームであるにもかかわらず、しっかりと声を掛け合いながら情報を整理し、順番に編集作業が進められていく。ブラウザを更新していくと、「神田の大火」の記事が少しずつ進化していくのが確認できる。結果として、当初の予定より 10 分だけ作業時間を延長して、講評の時間に入った。

猿楽大火、そして三崎大火の順番に、チームごとに自分たちが行った作業と苦労した点、心残りの点について報告していく。猿楽大火の中項目については、限られた時間のなかで、基本的な情報に加えて当時の消火技術や特筆すべき個別の被害状況、さらには当時黎明期にあった火災保険についての記述も組み込んだ内容となった。チームのメンバーたちも、それぞれに反省の弁を述べながらも、それなりの手ごたえを感じていたようだった。三崎大火の中項目については、扱われた情報の量としては少し少な目ではあったが、基本的な情報はしっかり押さえている。さらに火元に関する下位項目では、火元をめぐるの時系列を異にする複数の資料から、多角的な記述を行っており、かなり深く資料を読み込んだことがうかがわれた。

限られた時間で行われた作業としては、いずれも十分なものと言える。もちろん個々の課題は多く残っている。たとえば猿楽大火においては、それぞれの下位項目間で抽象度が一致していない部分もあり、記事全体のバランスとしては改善の余地がある。また個々の情報についても、背景となる文脈の提示が不十分であることで、その意義が伝わりきっていない記述もあった。三崎大火においては、広範な資料をさばききることができず、きわめて重要な論点にもかかわらずカバーしきれなかったものもあった。ただしウィキペディアタウンは、完璧な記事を作ることがゴールではない。もちろん一定以上の記事の質を担保することは重要だが、ワークショップに参加した体験としては、むしろやり残したことがあった方がよい、という側面もある。ウィキペディアは絶えず成長する百科事典であり、完成形というものはない。ここの記事においても同様だ。調べれば調べるほど、書くべき事柄は増えていき、結果として記事も成長していく。ウィキペディアがもつこうしたダイナミズムを体感することも、このワークショップにおいては重要な側面だ。

運営側からすると、ウィキペディアタウンを開催するにあたってどのくらいの資料を用意すべきか、というのは悩ましい問題だ。もちろん記事を執筆するための最低限の資料は必要だ。しかしトピックによっては、活用できる文献の量は際限がなくなる。そしてワークショップの限られた時間では、資料が多すぎても活用しきることはできない。ではどこまで絞るのがよいのか。この問いには答えはないが、わたしたちのゼミで実施してきたウィキペディアタウンでは、使えそうな文献であればできるだけ多く集める、という方針でこれまでやってきた。それは、ワークショップの時間内で役に立つかどうかというよりも、むしろそのような圧倒的な資料の量に接すること自体が、とても貴重な経験になるという判断にもとづくものだ。分け入っていけばいくほどさらにその奥がある、という感覚はいかなる研究においても重要となるが、ウィキペディアの記事執筆についても同じことは当てはまる。

ウィキペディアの記事執筆には完成がない、というこの性質は、ウィキペディアタウンというワークショップにとっても重要となる。ワークショップの時間そのものには終わりがあがあるが、しかしそこで参加者が書き始めた記事は、ワークショップ終了後にもいくらかでも書き足していくことができるからだ。今回は情報をスプレッドシートに集約し、国会図書館のデジタルコレクションへのリンクも含めることで、参加者が家に帰ってから資料を参照し、記事のブラッシュアップをしていきやすい環

さらにこの開かれたプロセスの一部としてのウィキペディアタウンという考え方は、神保町というフィールドとも非常に相性がいい。歴史を持ち、日本の近代化において重要な役割を果たしてきた神保町やその周辺地域である神田は、ただしくトピックを選択すれば、いくらでも分け入っていくことのできる深い森として機能する。だから調べれば調べるほど資料が出てくるし、扱うべき論点も非常に多岐に渡る。この場所が持つポテンシャルを最大限に生かすためにも、神保町で行われるウィキペディアタウンはより開かれたものとして設計するのが望ましいと考える。

[illegible]

図 17 猿楽大火についての中項目

脚注 [ソースを編集]

1. ^ 中村 1985, pp. 101-102.
2. ^ 藤村 2004, p. 60.
3. ^ 神田聖徳書道伝道委員会 1975, p. 94.
4. ^ 国語刊行会 編 1964, p. 234.
5. ^ 東京の消防百年記念行事推進委員会 1980, p. 42-42.
6. ^ 藤村 2004, p. 71-78.
7. ^ 東京の消防百年記念行事推進委員会 1980, p. 71.
8. ^ 日本建築新聞 1981.
9. ^ 東洋館 1892.
10. ^ 東京市 1919.
11. ^ 川邊・豊野 1905.
12. ^ 中村 2010, p. 267.
13. ^ 近藤 1983.
14. ^ **火災** 焼山 1978, p. 71.
15. ^ **火災** 6.8. 神田の火災(火災) 火災, 神田中学校・池袋高等学院. 2024年2月25日閲覧。
16. ^ **火災** 東洋文化遺産 1933.
17. ^ **火災** 東洋雑誌174号 1913, p. 61.
18. ^ 神田消防組合 1935.
19. ^ **火災** 年 1913, p. 63.
20. ^ 海潮 1913, p. 275.

参考文献 [ソースを編集]

- ・中村 著『神田文化史』神田史蹟研究会、1905年。
- ・藤村 著『明治の東京紀行』岩波書店、1905年。
- ・神田聖徳書道伝道委員会 著『神田聖徳書史』聖徳寺神田聖徳書院、1905年。
- ・東京の消防百年記念行事推進委員会 著『東京の消防百年の歩み』東京消防庁、1980年。
- ・国書刊行会 編『江戸国家日本消防史』国書刊行会、1905年。
- ・新橋本報『新仏教 14(3)』、新仏教同志会、1913年。
- ・千屋正『日本の救世主』数世堂日本堂、1913年。
- ・『東洋雑誌174号』東洋協会、1913年。
- ・富山久著『泉象と火災：日本の風土と火災』全国印刷法文出版、1978年。
- ・東洋文化協会『儒学、明治、大正回顧八十年史 第9巻』東洋文化協会、1933年。

図 19 脚注と参考文献

3. まとめ

今回のワークショップでは、特定の場所や建物ではなく、「神田の大火」という広範な影響を巻き起こした災害という事柄を対象とした。その選択に伴う難しさはもちろんあったが、しかし同時にだからこそ見出せた可能性というものもあった。たとえば街歩きの際には、大火で焼失した範囲を実際に歩くという活動を行った。ウィキペディアタウンを行う際には、いつも何らかの形で想像力によるタイムトラベルという側面が含まれるが、1時間弱の時間を延々と消失範囲に沿って歩くという経験は、このタイムトラベルをより生々しいものとして体験させてくれた。さらにまた大火という出来事の影響範囲の大きさから、日本の近代化というとても大きな歴史的文脈を垣間見せてくれる特別な機会にもなった。神保町で明治、大正の事柄を扱えば、もちろんどこを叩いても近代化の響きが返ってくるわけだが、しかし大火は地理的な範囲の広さだけでなくさまざまな側面に影響を及ぼすものでもあり、それ一つで多種多様な響きを集めることができる。個別のトピックではカバーすることができない、きわめて多角的な日本の近代化の像を結ぶことが可能となった。

しかし過去の資料を細かく探っていくことでとりわけ印象深かったのは、「神田の大火」という大きな看板の影で、実際に被害を受け、右往左往しながらも復興のために動いていった個々に人間の声であった。大きな事件の足元では、必ず生きた人間がいる。そして文献資料の片隅にも、そうした生きた人間の声が辛うじて反響している。その声に耳を傾けることで、過去の災害が教科書に載った情報ではなく、誰かの生きた体験として想像可能となる。こうした想像力を養う機会という点でも、神保町で災害をテーマとしたウィキペディアタウンを実施することには大きな可能性がある、という点も強く感じることができた。

第 3 章

防災に必要な情報・備
蓄品等のアーカイブ化

第1節 災害時の栄養・食支援のために学生が発信する動画コンテンツの分析

酒井 治子（東京家政学院大学 人間栄養学部）

1. 背景と目的

近年の東日本大震災後、関東東北豪雨災害、熊本地震、大阪北部といった災害の教訓を受け、厚生労働省をはじめ各省庁や自治体、学会等から、災害の栄養・食支援に関するガイドラインやマニュアル、支援ツール等が整備されてきた^{1~10)}。実際に、東日本大震災の被災3県（岩手、宮城、福島）に在住する日本栄養士会会員1,991名を対象にした調査結果¹²⁾でも、発災初期の避難所で、乳幼児および高齢者の支援ニーズが高く、その後、中長期にわたって高齢者および慢性疾患患者の支援ニーズがあったことが明らかになっている。

特に、乳幼児や高齢者、また、アレルギー疾患のある子ども、糖尿病患者等の方が帰宅困難者となった場合、特別な配慮も必要である。大規模災害発生時の栄養・食生活支援活動タイムライン²⁾をみると、3日間の運営を基準とする一次滞在施設はフェーズ4段階の内、フェーズ1、フェーズ2にあたる。備蓄支援物資の提供、炊き出し、特殊栄養食品ステーションからの支援、要配慮者への支援、当然、食中毒・感染症の予防が必要であることがわかる。

こうした災害時に活躍する人材を育成するという観点から、平成31（2019）年に日本栄養改善学会が報告した「管理栄養士養成のための栄養学教育モデル・コア・カリキュラム」においても、「災害時の栄養対策」といった地域防災の要としての役割が課せられている。都道府県や市町村などの行政で働く管理栄養士・栄養士は、県民や市民のために、災害時の救援体制を整備する役割を担っている。同様に、栄養学教育モデル・コア・カリキュラムには「給食施設における危機管理対策の基本」等といった項目も含まれている。病院や高齢者施設、保育所、学校、職場などで人々の食と健康を支える管理栄養士・栄養士は、災害時の停電や断水などに備えて施設内の対象者のために数日分の食料を備蓄したり、厨房が使えなくなった際に屋外などで炊き出しができる訓練も必要である。特に、管理栄養士・栄養士の専門性がより発揮されるのは、食物アレルギーを有する人、糖尿病や腎臓病等の慢性疾患や摂食嚥下障害を有する人、乳幼児など、特別な配慮が必要な人々（要配慮者）に対して、専門的な栄養・食生活支援を行うことである。

そこで、本報では、人間栄養学科の3年次科目として、「災害時の栄養・食生活に備える」防災教育の視点を盛り込み、栄養教育の実践力を養うことを目標とする教育を行い、学習者の実態把握のためのアセスメント内容の抽出、Google Formsによるニーズ調査票の作成、学習案の立案を試みた。学生が考案した動画コンテンツを分析することで、若年成人の視点からの動画のニーズを把握することを目的とした。

2. 方法

2-1 対象

令和3年度後期の授業科目「栄養教育実習Ⅱ（必修 1単位）」を履修した人間栄養学部人間栄養学科の3年生、4クラス、計136人を対象とした。学生5～6名を1班で構成し、計24班となった。班分けにあたっては学外での臨地実習の日程が重ならないように配慮したため、無作為割り付けではない。

2-2 授業の内容と構成

2-2-1 授業目標

本実習では、栄養教育総論、方法論、ライフステージ別栄養教育論などの理論はもちろんのこと、今までに修得してきた食品、また、その調理、そして、人体の成り立ちや疾病構造、地域社会を理解する公衆衛生・栄養に関する知識や技術の統合化を行い、栄養教育の総合的・実践的な展開力を養うことをめざしている。「災害時の栄養・食生活に備える」防災教育の視点を盛り込み、学習者の実態把握のためのアセスメント内容の抽出、Google Forms による評価票の作成、学習案の立案（オンデマンド型動画および紙面教材等の配信教材の作成）、評価計画までのプロセスをフルコースで行う実践力を養うことを目標とした。

2-2-2 授業内容（表 1）

授業展開の一覧を表 1 に示した。栄養教育、ヘルスプロモーション等の理論を確認した上で、災害時の食支援に関する教育目標を各班で設定し、栄養教育（食育）の実践的な展開を計画立案した。

表 1 本授業の展開

回	項目	内容
第 1 回	オリエンテーション 食育の計画方法1 社会・疫学診断 phrase1・2 と 行動・環境診断 phrase3	実習の目的、進め方の確認。 食育の栄養・食生活の枠組みの捉え方。食育の計画の作成方法。 PP モデルを活用した「災害時の栄養・食生活に備える」と QOL・健康状態との関連項目の抽出。
第 2 回	食育の計画方法2 行動・環境診断 phrase3 教育・組織診断 phrase4 行政・政策診断 phrase5	各対象に応じて、「災害時の栄養・食生活に備える」に関連する要因の分析と、そのための実現要因分析。「災害時の栄養・食生活に備える」推進の栄養教育の場(拠点・人)の設定。既存に配信されている「災害時の食支援」に関する動画の抽出と、栄養素レベル、健康状態レベル、QOL 分析。
第 3 回	食育計画の作成 3	食育計画書の作成。目標の明確化。 【課題・個人】食育計画書
第 4 回	食育計画の作成 4	個人による班の食育計画書案の決定と修正 班による食育計画書案の作成
第 5 回	食育計画の作成 5 食育の教材 動画の撮影に向けて	班による食育計画書案の作成 動画の撮影方法を学ぶ。動画や紙面教材に盛り込む食事を考え、教材案を考える。撮影やそのための資料収集
第 6 回	動画・紙面教材の作成1	教材を作成する 動画や紙面教材に盛り込む食事を決定。発注書の作成
第 7 回	食育計画の作成 6 動画・紙面教材の作成2	教材の作成 撮影やそのための資料収集
第 8 回	動画・紙面教材の作成3	発注書の完成、調理撮影
第 9 回	食育計画の作成 7 作成した動画評価のための調査設計	予算などの立案。 教材作成と動画の撮影 調査設計 Google Forms の作成
第 10 回	動画・紙面教材の作成4	動画の撮影 食育計画書の修正
第 11 回	動画・紙面教材の作成5	動画の撮影 食育計画書の修正
第 12 回	食育計画の作成 8	動画の編集 食育計画書の修正
第 13 回	食育計画書の企画案の説明と動画視聴と評価1	食育計画内容の発表(各班 45 分)
第 14 回	食育計画書の企画案の説明と動画視聴と評価2 まとめ	食育計画内容の発表(各班 45 分) 全体のまとめ

第2回には、既存に配信されている、「災害時の栄養・食生活に備える」に関する動画を班ごとに検索し、災害によってどのような健康状態になる可能性があるのか、そのために摂取すべき栄養素とは何か、そして、災害時であってもどのようなQOLを求めることを想定しているのかを各班で分析した。

第3回～5回にかけて、食育計画書の大枠を設定し、動画の構成について具体的な展開を考えていった。第5～8回にかけては防災・減災に必要な備蓄品を収集し、静止画を撮影したり、被災した場合の食事の調理動画の撮影を行った。第9回には作成した動画の評価のための調査設計をおこない、Google Formsの作成を行った。第10～12回には動画の編集と、食育計画書の修正を行う時間とした。第13～14回は班ごとに、45分の所要時間の中で、食育計画の企画案の説明と、そのための動画の評価計画を発表し、実際に作った動画を他の班の学生に向けてプレゼンテーションを実施した。

2-2-3 学生が提案する食育動画の内容（表2）

食育の目標は、「災害時の栄養・食生活に備える」という行動目標に向かって、そのための学習目標、行動目標、環境目標、結果目標を設定し、食育の計画を立案した。食育の対象は、幼児・小学生、妊婦・授乳婦、勤労者・一般家庭向け、高齢者世帯等となった。

食育の方法は動画形式とし、教育教材には学生自身が提案する備蓄品や献立を用いること、できるだけ学習者が主体的に参加できること、動画を視聴する学習者が災害時の栄養・食生活に備えるという行動変容に結びつきやすいこと考慮することとした。動画の作成者は学生班の構成員の5～6名とした。

評価計画については、講座の実施前後の評価により、学習内容が学習者の行動変容につながったかという影響評価、また、その結果としてどのような健康状態やQOLの向上をねらっているのかという結果（成果）評価、その基盤にある食育の講座の運営状況を確認する経過評価の項目を抽出し、Google Formsの設計に盛り込んだ。

学生が提案する食育計画書の内容は表2のとおりである。目標の設定、動画の流れを含んだ学習案（調理実習含む）、評価計画を含んだ様式を教員が学生に提示した。各班が作成した食育計画書はプレゼンテーション時に他の班の学生に説明することとした。

表2 学生が企画する食育計画書の内容

- | |
|---------------------------------|
| 1. 活動拠点 |
| 2. 対象 |
| 3. 学習者とそれらをめぐる栄養・食生活等アセスメント枠組み |
| 4. 結果目標（健康・QOL） |
| 5. 行動目標（行動・ライフスタイル） |
| 6. 環境目標（強化要因・実現要因） |
| 7. 今回の動画によって期待する学習目標（知識・態度・スキル） |
| 8. 食育の目標の設定の背景 |
| 9. 「災害時の栄養・食生活に備える」ための食育動画の提案 |
| 10. 評価計画 |

3. 結果及び考察

3-1 学生が企画した動画の学習内容（表4）

今回の「災害時の栄養・食生活に備える」という行動目標に向かって、各班で利用者の学習目標、行動目標、環境目標、結果目標を設定し、この行動変容のための学習目標を立案し、対象別にその一覧を表4に示した。

学生が選定した対象は、妊婦・授乳婦、乳児を持つ親、幼児の保護者、小学校低学年、小学校高学年、一人暮らしの若者（大学生）、一般家庭、自立度の高い高齢者のみの世帯に分かれた。妊婦・授乳婦、乳児を持つ親、高齢者といった要配慮者を対象とした動画の提案があり、その内容も栄養管理を必要とする内容が提案された。

妊婦・授乳婦では「災害時の妊婦の備蓄や必要な知識を身に付けよう」「授乳婦に必要な栄養を備蓄品で調理して摂取しよう！」「妊娠時・乳幼児と被災したときの食事について」と題して、乳児を持つ親には、「いざという時赤ちゃんがいる家庭で親子の命を守るために」「備える防災 災害時の赤ちゃんのご飯ってどうするの？」と題して1/4の班がとりあげていた。動画の配信場所としては市町村の保健センター等のホームページ、また、母親学級等、ベビー用品売り場等での活用等も考えられていた。災害時の妊婦の食事や備蓄について理解すること、災害時の授乳方法や起こりうる病気のリスクについて理解を深めることや、災害時の授乳法、液状ミルクや離乳食等、その具体的な方法が動画、また、パンフレットでとりあげられた。

幼児の保護者には、「子どもと一緒に備えよう！災害時でも美味しい食事を」「ローリングストックを生かした献立作成（ローリングストックってなに？）」と題して、「簡単に調理できる非常食のメニューを知る。食物アレルギー対応の商品があることを知る」「幼児の非常時の食事対応、食物アレルギーに配慮した非常食があることを知る」ことが学習目標となり、食物アレルギーへの対応も特徴となっていた。配信場所としては保育所等の保護者会や園のホームページ等が想定されていた。

小学生には、「こんなときってどうするの？ ～いつでも元気にいるために～」「非常食を知ろう！～小学生でもできる災害食クッキング～」「アルファ米ってなんだろう？」「災害時クッキング」「災害時の食事ってどうする？？ 学ぼう、防災食！」「備蓄食品DE 簡単！ポリ袋クッキング」と題して、小学校の特別活動や防災月間での避難訓練時での視聴が想定されていた。

一人暮らしの若者（大学生）には、「備蓄品を活用しよう！～ローリングストックの美味しい食べ方～」「サバ缶くんと学ぶ災害調理」「食べ物で作る、みんなの未来」「一人暮らしの不安を解決！災害時のローリングストックについて」と題して、ローリングストックのための備蓄食品のお得な買い方や、ポリ袋を使った調理技術の紹介等がされた。一般家庭も若者世代と同様の学習目標が掲げられ、大きな違いはみられなかった。一般家庭には備蓄食品が販売されているスーパーマーケット、大学生には大学の食堂等での配信もみられた。

自立度の高い高齢者には、「自分の食を守ろう～災害時の非常食クッキング～」と題したテーマで1題の動画提案があった。公民館で紹介する場面を想定して作成され、災害時に不足しがちな栄養素を摂取するための摂取方法や、食選択ができるようになることが学習目標となっていた。

授業の2回目に、web サイトで配信されている動画を分析し、その内容を参考にした部分もみられたが、学生ならではの新たな視点を含めようとする意欲の高まりを受け止めることができた。

表4 教育の場の設定別 学生が提案した学習目標①

対象者	テーマ	学習目標	活用場面
妊婦・授乳婦	災害時の妊婦の備蓄や必要な知識を身に付けよう	災害時の妊婦の食事や備蓄について理解する。	発信場所：ホームページ 配信時期：常に 動画活用場面：災害時
	授乳婦に必要な栄養を備蓄品で調理して摂取しよう！	授乳婦に必要な栄養素について知ることができ、栄養素を考えた非常食を備えることができる。 備蓄品を使用して栄養バランスのいい食事を作ることができる。 日頃から防災について意識することができる	発信場所：保健センター、市町村、病院（産婦人科） 配信時期：防災の日 動画活用場面：非常食を備蓄するために買い物に行く前、災害時の食べ物に困ったとき
	妊娠時・乳幼児と被災したときの食事について	災害時の授乳方法や起こりうる病気のリスクについて知り、母子ともに健康に過ごせる知識と技術を身につける。 災害時に必要な栄養を知る。	発信場所：ママパパ学級・産婦人科の待合室 配信時期：年中 動画活用場面：防災訓練、ママパパ学級
乳児を持つ親	「知っておくと安心！災害時の食事について」	災害時の離乳食のつくり方や乳児に必要な栄養素について理解する 災害時の乳児の授乳を身につける 親も必要な栄養素について認識し、摂取する	発信場所：ベビー用品売り場 配信時期：9月（9月1日：防災の日） 動画活用場面：ベビー用品売場の離乳食のコーナーの近くに特設コーナーを作って動画を流す 災害時に必要なものをベビー用品売り場にきた保護者の目に留まるようにする
	いざという時赤ちゃんがいる家庭で親子の命を守るために	・災害発生時に食事をするできるよう、普段から適切な方法で食材の備蓄を行う。 ・災害発生時でも問題なく1日3回の食事をとることができる。	・災害発生時に食事をするできるよう、普段から適切な方法で食材の備蓄を行う。 ・災害発生時でも問題なく1日3回の食事をとることができる。
	備える防災 災害時の赤ちゃんのご飯ってどうするの？	食知識：災害時の調乳の仕方、離乳食の作り方を理解する 食中毒の3原則を理解する 災害時に必要な備蓄について理解する 食態度： ・災害時の調乳を自分で作れるようになり、健やかな成長につなげる ことで体調不良等を回避する ・災害時の離乳食を自分で作れるようになり、健やかな成長につなげることで栄養不足を回避する ・災害時の調乳のスキルを事前に習得することでお母さんの不安が和らぐ ・災害時に必要な備蓄を事前に用意しておくことでお母さんの不安が和らぐ 食スキル：災害時の調乳の作り方を習得する 災害時の離乳食の作り方を習得する	発信場所：アカチャンホンポの店舗 配信時期：8月25日～9月8日 （防災の日が9月1日なのでその前後2週間） 動画活用場面：買い物をしに来た親御さん、ママさん
幼児の保護者	子どもと一緒に備えよう！災害時でも美味しい食事を	簡単に調理できる非常食のメニューを知る 食物アレルギー対応の商品があることを知る	発信場所：掲示物、保護者だより、園のホームページにQRコードを表示 配信時期：9月（防災の日付近） 動画活用場面：災害時の食事について知りたいとき。備蓄や調理方法について知りたいとき。
	ローリングストックを生かした献立作成(ローリングストックってなに？)	・幼児の非常時の食事対応について知る ・食物アレルギーに配慮した非常食があることを知る	発信場所：保育園、幼稚園 配信時期：秋、冬 動画活用場面：保護者会
小学校低学年	こんなときってどうするの？ ～いつでも元気にいるために～	好き嫌いをなく食べることの大切さを知る 災害時に必要な栄養素を学び、バランスのよい食事を摂ることができる 非常食や備蓄に関心を持ち大切さを知る。 どこで非常食が売られているのかわかる	発信場所：小学校、学童 配信時期：9月、避難訓練前後 動画活用場面：防災訓練の前後、防災週間、学活の時間
小学校高学年	非常食を知ろう！～小学生でもできる災害食クッキング～	・防災食として活用できる食品を知っている。 ・災害時でも使える調理スキルが身についている。	発信場所：小学校 配信時期：災害が多く起きるとされている秋 動画活用場面：授業内で動画を流す
	アルファ米ってなんだろう？	非常食に興味を持つようになる。 どのような非常食があるか理解する。 非常食が必要な理由を知る。	発信場所：YouTube 配信時期：9月 動画活用場面：避難訓練の後
	災害時クッキング	家にある食材と非常食で災害時でもできる調理法を学ぶ	発信場所：学校の授業（一斉授業） 配信時期：9月（防災月間） 動画活用場面：総合的な学習の時間
	災害時の食事ってどうするの？ 学ぼう、防災食！	どのような常備食が備蓄されていることが多いのかを知る 防災食を常備することの大切さを学ぶ ライフラインを使用しない調理器具を知る 例）ガスコンロ、調理用のポリ袋（鍋が汚れない） 子供が動画を視聴し、家族などにも学んだことを伝えられる知識を身につける	発信場所：小学校（特別活動） 配信時期：9月1日（防災の日） 動画活用場面：特別活動（防災の日）
	備蓄食品DE簡単！ポリ袋クッキング	災害により起こる影響について理解する。 災害時にどのような行動を取ったら良いのかを理解する。 災害時における食事の作り方を理解し、習得する。	発信場所：小学校の家庭科室 配信時期：9月1日（防災の日） 動画活用場面：調理実習の前

表4 教育の場の設定別 学生が提案した学習目標①

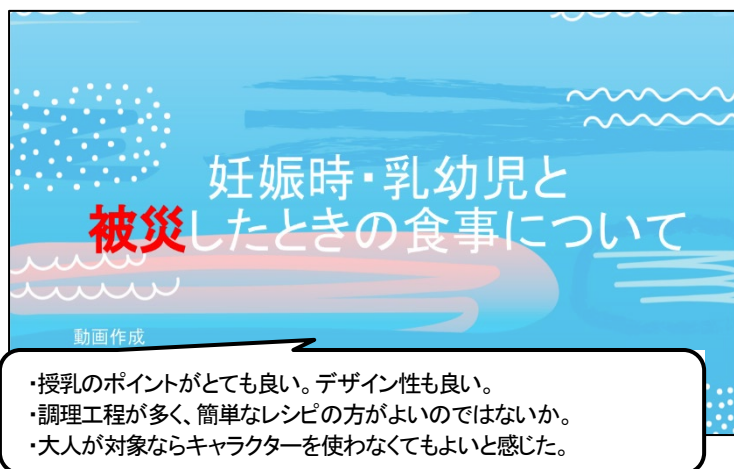
対象者	テーマ	学習目標	活用場面
1人暮らしの若者・大学生	備蓄品を活用しよう！ ～ローリングストックの美味しい食べ方～	・ローリングストックをするには備蓄食材にお金がかかるため、お得な買い方を知る。 ・食中毒について知る。 ・備蓄食品の活用レシピを知る。	発信場所：ボランティアサークルの大学生からSNS(You Tube)での配信 配信時期：無期限 動画活用場面：・大学で学生全員に動画をメール配信、メールにURLとQRコードを貼り付け、学内にQRコードが載っているポスターを掲示。 ・一人暮らしの大学生が災害に備えた備蓄品の確保をしたいときや備蓄品の期限が切れそうなどに見れるようにする ・災害対策講座などで流してもらう ・SNSで配信もする
	サバ缶くんと学ぶ災害調理	食知識：災害時に不足しがちな栄養素を知り、備蓄食品についての知識を得る 災害時に備蓄食品を利用した調理法や調理の作り方を理解する 食態度：災害時の食事について関心をもつ 食スキル：ポリ袋を使った調理技術の習得	発信場所：スーパー 配信時期：春 動画活用場面：夏の自然災害に向けて、スーパーのレトルト食品や缶詰売り場近くで動画をながす
	食べ物で作る、みんなの未来	・災害時の食生活について改善意欲がある ・災害食と備蓄量を知り、普段から活用できる ・災害時に正確な情報を受発信できる ・過去の災害で学生が行っていた炊き出し活動を知る	発信場所：大学の食堂 配信時期：5月から10月(災害の多い梅雨から秋頃)
	一人暮らしの不安を解決！災害時のローリングストックについて	食知識：災害食がどのようなものか、どんな災害食を備蓄するべきか等の知識を理解する。 食態度：結果期待)防災グッズが揃うことで慌てずに対応することができる。防災グッズが揃っているため災害時も食事をとることができ、最低限の栄養を確保できる。 自己効力感)防災グッズ、災害食の知識・スキルを修得し、災害時に対策できるという自己効力感が高まる。 食スキル：災害時の食事の取り方のスキルを習得する。	発信場所：YouTube、インスタ、X(旧：Twitter)などのSNS 配信時期：季節の変わり目 動画活用場面：災害食について興味を持った時 ローリングストックをする時
一般家庭	非常食でも日常食を！ ～ローリングストック法と非常食×根菜のアレンジレシピ～	ローリングストック法について知る。備蓄に適する食品を知る。 備蓄する食材の保存期間・方法を知る。	発信場所：市町村のホームページ(防災のページ)。地域新聞への動画案内の掲載。 配信時期：9月頃(小学校等での防災訓練の時期にあわせて配信) 動画活用場面：地域ごとの防災訓練時、災害時の栄養・食生活に関する食育講座開催時
	家庭で簡単・楽しく非常食をつくらう☆彡	・備蓄食品を買ってみる。 ・備蓄食品を使用したレシピを調べてみる。	発信場所：スーパー 配信時期：一年中 動画活用場面：スーパーの売場
	美味しい！簡単！男めし！	・保存食を準備する際の目安日数、保存が効く食材の特徴を理解する。 ・三大栄養素の特徴を理解する。 ・適切な量を理解する。 ・食事に対して少しこだわりを持つようになる。 ・食事の大切さを理解する	発信場所：YouTube、SNS 配信時期：3～4月 動画活用場面：引っ越しをするタイミング
	災害備蓄食品の重要性について楽しく学ぼう！	・災害時備蓄食品を知り、その食品を活かしたレシピを知ることができたか？また、災害時備蓄食品の必要な量を知ることができたか？ ・たんばく質、食物繊維、ビタミン、ミネラル、カルシウム等の不足しがちな栄養素を知ることができたか？ ・災害時の調理(洗い物を増やさない等)や加熱調理法が実践できたか？ ・栄養バランスの整った食事を準備することができたか？	発信場所：公共交通機関 配信時期：1年中(4月から) 動画活用場面：災害時の食事
	缶詰に飽きたあなたのためのアレンジレシピ！	・備えるべき非常食について興味を持つ ・非常食を使った料理の活用方法がわかる ・災害時に不足しがちな栄養について知る	発信場所：スーパーの缶詰コーナー、Youtubeでの配信 配信時期：年中 動画活用場面：家での食事、災害時
自立度の高い高齢者 高齢者のみの世帯	自分の食を守ろう～災害時の非常食クッキング～	・災害時に不足しがちな栄養素を摂取するための摂取方法や、食選択ができるようになる ・災害が起きた際にどのように調理すれば良いかが分かるようになり、それができるようになる	発信場所：公民館 配信時期：オール時期 動画活用場面：公民館などで災害時の食事を紹介する際

3-2 学生が提案した動画教材とパンフレット教材(図1)

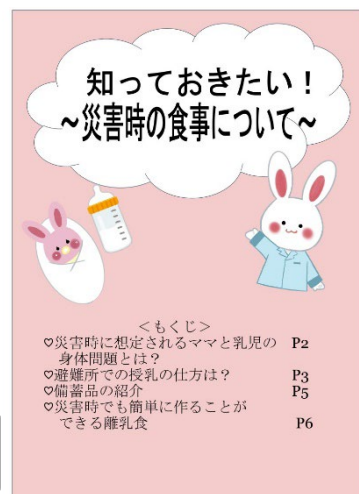
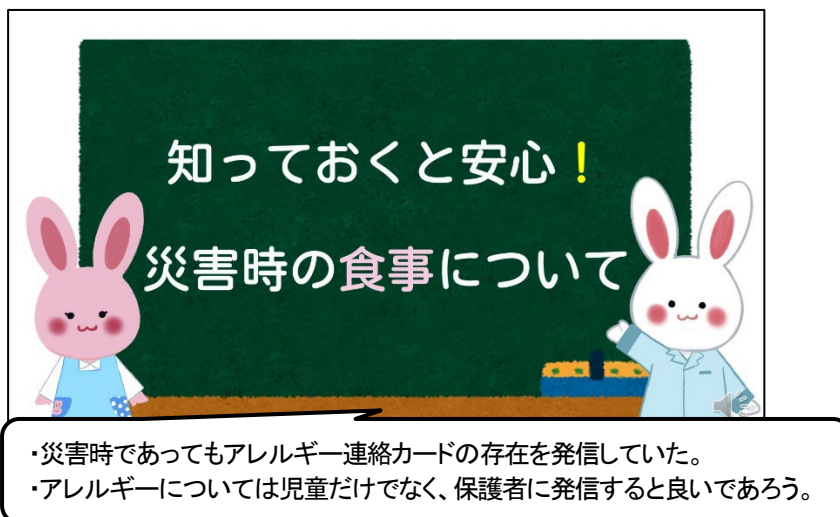
学生が提案し、評価の高かった動画教材とパンフレット教材を例示する。要配慮者を対象とし、学生ならではの視点から教材の作成がされた。

図 1 学生が提案した動画教材とパンフレット教材と学生コメント（対象別）

対象：出産を控えた妊婦、授乳婦



対象：乳児を持つ親



対象：乳児を持つ親



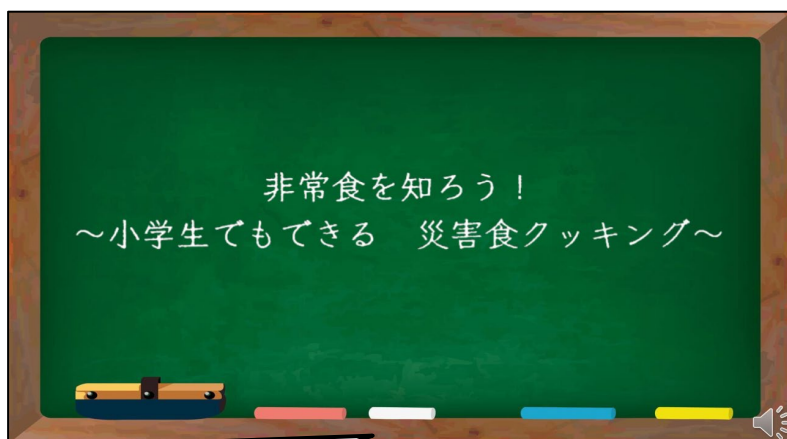
対象：小学校低学年



- ・オリジナルキャラクターを使用したアニメーション動画。
- ・クイズを含めた内容で興味をもちやすい。
- ・小学校低学年向けには、内容が少し多いことが気になった。



対象：小学校高学年



- ・災害時であってもアレルギー連絡カードの存在を発信していた。
- ・アレルギーについては児童だけでなく、保護者に発信すると良いであろう。

非常食を知ろう！
～小学生でもできる
災害食クッキング～

東京家政学院大学
人間栄養学部
人間栄養学科
3HA 5班

一般家庭、若者



- ・ローリングストックに着目した内容で分かりやすい。
- ・実際に実践しやすい内容。



対象：一般家庭

非常食でも日常食を！
～ローリングストック法と非常食
×
根菜のアレンジレシピ～

- ・災害に関する情報がたくさんまとめられていた。
- ・デザインが見やすかった。
- ・材料の種類がやや多かった。



対象：勤労者、一般家庭向け

美味しい！簡単！男の災害食レシピ！

これで安心◎

非常用

- ・災害時の食の課題が伝わりやすかった。
- ・大人が対象ならキャラクターを使わなくてもよいのかもしれない。



一緒に知ろう！防災食

- ・動画のクオリティーが全体的に高い。
- ・パペットは子どもが興味をもって視聴する媒体だと思う。

災害時の備蓄食品
について

～考えよう、備えよう～

アンケートのご協力をお願いします。

東京家政学院大学 人間栄養学部 人間栄養学科 3年HDクラス 1班